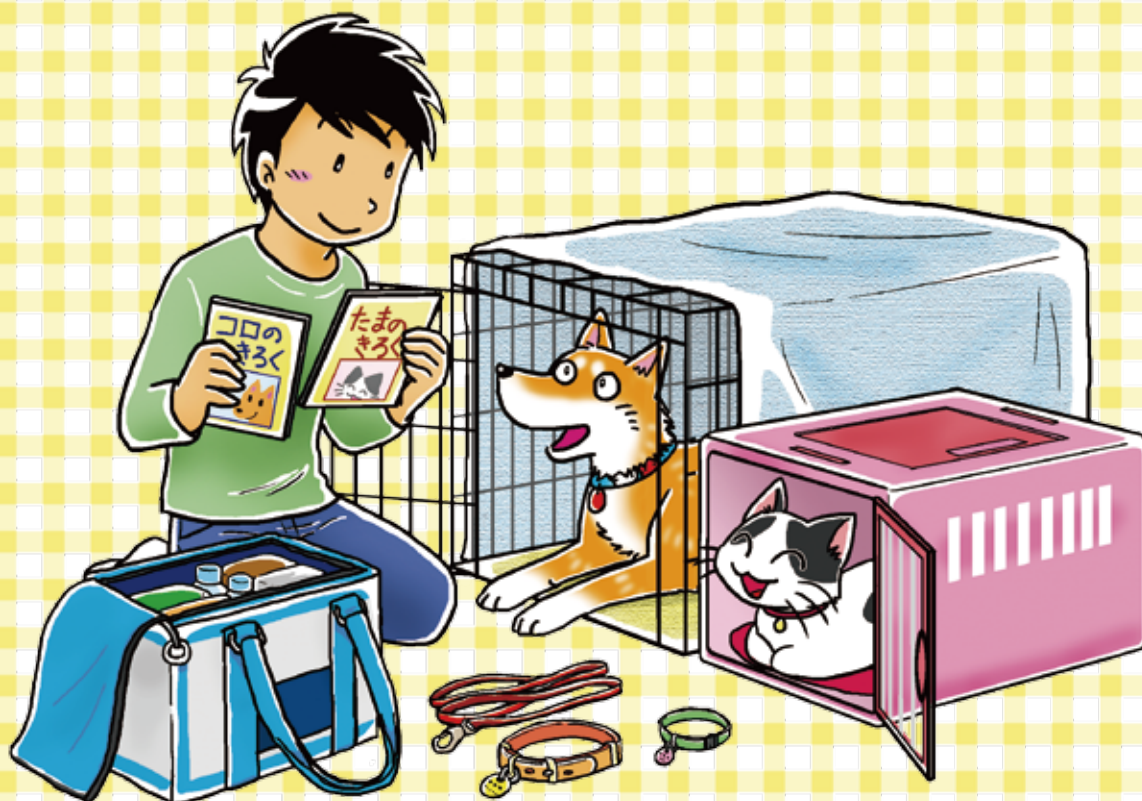


ペ
ッ
ト
も
守
ろ
う
!

防災対策

備えよう！いつもいっしょにいたいから 2



災害時にペットを守れるのは飼い主だけです。
避難が必要か判断することはもちろん、
人やほかの動物に友好的であることや
むやみに吠えない、ケージに入るなど
社会化や日頃からのしつけが重要です。

ペットの防災対策

災害は突然起こります。いざというとき、ペットを守れるのは飼い主だけです。まず飼い主が無事でいること、そして避難する場合にはペットと一緒に避難場所に避難すること（同行避難）が基本です。ともに安全に避難でき、周りの人へ迷惑をかけず、安心して過ごすためには、日頃からの心構えと備えが大切です。



◇平成23年9月発行パンフレット「備えよう！いつもいっしょにいたいから」より◇

住まいの防災

住まいを災害に対して強くしておくことが、人とペットの安全にもつながります。

- ☐ 住まいの耐震強度の確認
- ☐ 家具の固定、転倒・落下防止
- ☐ 飼育ケージの固定、転倒防止（屋外飼育の場合は外塀やガラス窓の近くを避ける）
- ☐ ケージなどペットの避難場所（隠れ場所）の確保

健康管理としつけ

普段からワクチン接種など健康管理に注意し、動物の体を清潔に保ち、必要なしつけをしておきましょう。

- ☐ 予防接種や外部寄生虫の駆除
 - ☐ ブラッシングで抜け毛をとる
 - ☐ キャリーバッグやケージに慣らしておく
 - ☐ 「マテ（制止）」や「オイデ（呼び戻し）」や決められた場所での排泄などのしつけ
- ⇒詳しくは4・5・6ページ

家族の話し合いやご近所との連携

さまざまな場面を想定して、家族やご近所、飼い主仲間と防災について話し合っておきましょう。

- ☐ 家族間の連絡方法や集合場所
- ☐ ペットの避難方法や役割分担
- ☐ 留守中の対処方法と協力体制
- ☐ 緊急時のペットの預け先の確保

所有明示の徹底

ペットと離れ離れになったときのため、迷子札とマイクロチップなど、普段から身元を示すものを二重でつける対策をとりましょう。

- ☐ 鑑札、狂犬病予防接種注射済票（犬の場合）
 - ☐ 外から見える迷子札（鳥は足環など）
 - ☐ はずれる心配のない身元証明のマイクロチップ
- ⇒詳しくは3ページ

情報収集と避難訓練

住んでいる地域の防災計画を確認し、避難場所までの所要時間などを確かめておきましょう。

- ☐ 避難場所までの経路と所要時間
- ☐ 危険な場所と迂回路の確認
- ☐ ペット同行避難訓練への参加
- ☐ 動物が苦手な人への配慮

人と動物の安全確保と同行避難

災害が発生したら、まず自分の身の安全を確保し、落ち着いてから自分とペットの安全を守りましょう。

- ☐ 情報を集めて避難場所への避難が必要か判断
- ☐ 犬はリードや胴輪をつける（緩んでいないか確認）
- ☐ 猫や小型犬はケージやキャリーバッグに入れる
※キャリーバッグの扉はガムテープなどで固定する
※布などで包んで暗くして安心させるとよい

ペットのための備蓄品

ペットの災害時の備えは基本的に飼い主の責任です。

- ☐ 療法食、薬（必要なペットには必ず用意）
- ☐ 5日分以上のフードと水、食器
- ☐ 予備の首輪、リード（伸びないもの）
- ☐ 飼い主の連絡先やペットの情報を記録したもの
- ☐ ペットシーツ、トイレ用品、洗濯ネット（猫の逃げだし防止など）、好きなおもちゃ、においのついたタオル、ブラシ、ガムテープ、新聞紙、ブランケット（ペットの体を包める大きさ）などもあると便利

避難所と仮設住宅

動物が嫌いな人、動物のアレルギーを持つ人、幼い子供など多様な人々や動物が集まるため、ストレスからペットも体調を崩しやすくなります。

- ☐ 飼い主は普段以上に周りの人へ配慮する（特にふん尿に関するトラブルが多い）
 - ☐ 世話やフード確保など飼い主の責任の下で行う
 - ☐ 飼い主同士が協力して助け合う
 - ☐ 支援物資や情報を共有する
 - ☐ 獣医師やボランティアによる支援を活用する
 - ☐ ペットの体調に気を配る
- ⇒詳しくは6・7ページ

飼い主の責任

一緒につれていけますか？



●頭数を考える

一緒に連れて避難できる頭数は限られています。よく考えて適正な頭数を飼いましょう。既に複数頭を飼育していて家族だけの避難が難しい場合は、ご近所や飼い主仲間などをお願いしておくことが重要です。

●猫は室内飼い

猫が外にいますと、災害が起きても呼び戻しができず、避難の時に連れていけません。猫を室内で飼うことは、普段から猫の健康と安全を守ると同時に、災害への重要な備えです。

●不妊去勢をする

不妊去勢をしておくと、多くのペットと一緒に避難所などでも、繁殖のための争いやストレスを軽減することができます。また、飼い主とはぐれている間に繁殖して放浪する動物が増えれば大きな問題になります。マーキングなど問題行動防止のためにも不妊去勢手術をしておきましょう。

●大きさや健康状態

大型犬や病気のペット、自力で動けない高齢ペットを飼っている場合は、カートや補助具など移動手段を考えておきましょう。家族のほかにも、移動などを手伝ってくれる人を探しておく安心です。



身元を示すものをつけていますか？

突然の災害に驚いて逃げてしまい、ペットが迷子になることがあります。保護された際に飼い主のもとに戻れるよう、普段から、外から見える迷子札などをつけ、さらに、首輪などが取れてしまったときの確実な身元証明としてマイクロチップの装着といった二重の対策をとりましょう。

猫の場合

首輪と迷子札
マイクロチップ

※猫の首輪は引っ掛かり防止のため力加わるとはずれるタイプのものがよいでしょう。



犬の場合

首輪と迷子札
鑑札と狂犬病予防注射済票
マイクロチップ

※犬の鑑札と狂犬病予防注射済票の装着は狂犬病予防法で飼い主に義務づけられています。



その他の小動物の場合

動物の種類に応じて、足環、耳標、マイクロチップなどがあります。



※マイクロチップは15桁の個体識別番号が記録されたチップのことで獣医師により装着が可能です。専用リーダーで読み取り、データベースに照会すると、飼い主情報を確認できます。登録を忘れずに！

ペット同行避難訓練

災害時に備え、地元の獣医師会や団体、ボランティアなどと協力したペット同行避難訓練を実施する自治体が増えています。お住まいの地域で行われる避難訓練に積極的に参加しましょう。

茨城県では、災害発生時にペットと一緒に安全な避難場所へ避難することの重要性を周知し、避難場所におけるペットの受入体制を構築する目的で、ペット同行避難訓練を実施しています。



平成28年8月 高萩市立秋山小学校における同行避難訓練

受付作業と安全な留訓練、獣医師による健康チェック、マイクロチップ読取り等

静岡県では、ペット動物の災害対策を知ってもらうほか、ペットを飼育していない人にもペットの避難について理解を広げるために避難訓練を実施しています。



平成27年12月 長泉町立長泉小学校における同行避難訓練

クレートトレーニング実演、パンフレット配布による啓発、ペット防災用具の展示等

災害時に役立つ社会化やしつけ

社会化とは人やほかの動物、様々な物や環境に慣らしていくことです。他人に友好的に接することができます。人もペットも避難生活のストレスが減り、預ける場合や迷子で保護された時でも扱いやすくなります。災害に備えた特別なしつけというものはありません。避難所では、鳴き声や吠え声、他人を怖がる、咬む、臭いや抜け毛などがトラブルの原因になります。むやみに吠えたりせず、知らない人や他の動物がいても落ち着いていられたり、ケージやキャリーバッグに入るようにしておくことは、日常の生活でも重要です。

人や動物に慣らしておく

犬は子犬の頃から、なるべく多くの人や動物に接することで社会性をつけさせましょう。成長してからでも様々な物に慣らしていくことは可能です。怖がる場合は、積極的に触れ合うというより、平常心でいられることを目標にしましょう。苦手なことは無理強いしないで、おやつやおもちゃなど好きなものを使って、時間をかけて慣らしていきましょう。

猫も、来客に遊んでもらうなど無理のない範囲で、家族以外の人に慣らしておくといいでしょう。しつこくしないことがポイントです。なるべく首から上（頭部）をさわるようにしましょう。



様々な音や物に慣らしておく

いつもと違う音や物に囲まれることは、ペットにとっても大きなストレスです。日頃からいろいろな環境を無理なく体験させておくと、環境の変化によるストレスを軽減させることができます。

例：いつもと違う散歩コースを歩く、旅行やキャンプに行くなど

ケージに慣らしておく

ケージやキャリーバッグは動物病院に連れて行く時だけに使わず、日頃から扉を開けた状態で部屋に置き、ペットがくつろいだり眠ったりする「安心できる場所」として慣れておくようにします。避難時の速やかな連れ出しもでき、ケージの中で過ごす時間が長くなる避難生活でもペットのストレス軽減につながります。

※ケージの上部が開くタイプであれば、ペットの出し入れも円滑になり、そのまま治療を行う際も便利です。

※スリング（斜め掛け抱っこバッグ）は移動時に便利ですが、災害時に使う際は転倒や逃げ出し防止などの注意が必要です。

- 1 おやつなどで、ケージの入口近くに誘導し、さらにケージの中から奥へ誘導する。



- 2 ケージの中でおやつなどを食べさせる。

なるべくほめる



- 3 おやつなどで誘導しながらケージの外に出す。また中に誘導して食べさせる。



- 4 扉を開けたまま、おやつやフードを入れた食器を置いて、ケージの中で食べさせる。



- 5 1～4を繰り返していき、慣れてきたら、食べている間に扉を閉める。

静かに閉める



- 6 食べ終わる前に扉を開け、閉じ込められたと思われないようにする。

扉を閉める時間を少しずつ長くする



※猫はもともと狭いところに入りたがる性質があるため、中でフードを食べさせるようにすれば、早くケージに慣れるでしょう。

むやみに吠えないようにしておく

普段はおとなしいペットでも、たくさんの人や動物が集まる避難所などでは慣れない環境によるストレスで鳴いたり吠えることもあるでしょう。迷惑にならないよう、日頃からむやみに吠えないようにしておくこと、また、ストレスをやわらげられるよう、犬が吠える原因を知り、対策を考えておきましょう。

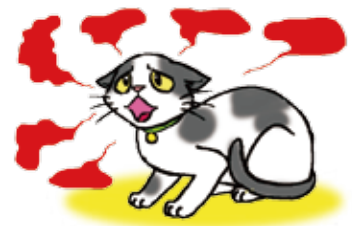
●要求によるもの

日頃から、犬が吠えた時に要求をかなえたり関心を向けていると、犬は要求が通るまで吠え続けるようになります。要求吠えのときは犬に関心を示さず無視をして、静かにしていたらほめて要求をかなえましょう。食べ物や飲み物がない、散歩に行きたいなど本来満たすべき要求もありますが、避難所では吠えて迷惑になっている犬をそのままにすることはできません。体が痛い、具合が悪いなど体調不良をうったえている場合もあるので、よく観察して、犬が吠える原因と対策を考えましょう。



●恐怖や不安によるもの

社会化が不十分だと見慣れない人や物に恐怖を感じたり、常に飼い主がそばにいる生活では飼い主と離れただけで強い不安（分離不安）を感じて鳴いたり吠えたりすることがあります。適切な社会的経験（人や動物、音や物に慣らす）を積み重ね、安心できる場所を作ってペットだけで過ごす時間を作ることが大切です。



体のどこでもさわられるようにしておく

どこでもさわられるようにしておくことで、災害時の健康チェックや応急処置、病院に行ったときなどにも役立ち、安心です。犬の横に座り、優しく声をかけながら、全身をさわってみましょう。足先、口元など、先端部分は敏感なので、嫌がる場合にはフードを使いながら慣らしていきましょう。犬が気持ちいいと思う場所を探してなでるのもよいでしょう。

※たたいて叱ったり、呼んで手元に来たときに叱ると、人の手を怖がるようになるので注意しましょう。

最初は首から

やさしくさわります

リラックスしてき
たら耳や足など

全身をさわれる
ようにします



●他人の手を怖がる場合

犬好きの友人などに協力してもらい、飼い主以外の他人にさわられても大丈夫なようにしておきましょう。

1

おやつなどをもち、目をあ
わさないように犬と横向き
に座る。

2

犬が近くまで来たら、手
のひらを開いて、下から
おやつをあげる。

3

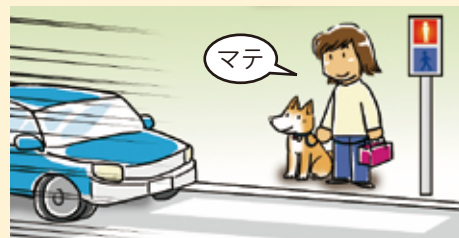
食べられるようになってき
たら、反対側の手で、やさし
く犬にさわる。

※「急に近付かない」「上から手を出さない」「大きな声を出さない」などが大切です。

※猫は動くものに強く反応します。おもちゃなどを動かして、スキンシップを図ってみましょう。

しつけの
マテとオイデ

いろいろある犬のしつけのうち「マテ（制止）」と「オイデ（呼び戻し）」は特に重要です。社会に受け入れられやすくなるほか、交通事故や逸走防止、災害時などにも役立ちます。



ペットの健康管理と応急処置

感染症の予防は日頃から

避難所には人だけでなく、多くの動物も集まります。非常時は衛生状態や栄養状態が悪くなり、ストレスで免疫力が低下することもあります。感染症の発生を防止するため、日頃から、ノミやダニなど寄生虫の駆除や予防、感染症の予防は必ずしておきましょう。預けることになっても、感染症予防をしてあることが条件の場合もあります。

混合ワクチン

ノミやダニなど外部寄生虫の駆除や予防

犬フィラリア症の予防

狂犬病予防接種(犬の場合)



避難生活での健康管理

災害は動物にも大きなストレスをあたえます。避難所など馴れない環境では体調も崩しがちですので、いつも以上に健康状態に注意しましょう。特に猫は具合が悪いことを隠そうとするため、よく観察してください。獣医師の巡回診療を利用するなど、異常を感じたらできるだけ早く診察を受けましょう。

日常の健康チェックのポイント

□食欲(食べない、ムラがある)や飲水量(多い、少ない)
嘔吐の有無、回数、吐いたものの形状
□便(下痢や便秘、血便)や尿(多い、色が濃い、血尿)の状態、回数
□呼吸の様子、咳、くしゃみ、鼻水
□眼やに、眼の状態(赤い、腫れている、涙が多い)

□体温(普段から腹部や耳など毛のない部分を触って体温を覚えておきましょう。正確には体温計で直腸温を測ります)
□脈拍(後脚の付け根に指をあてて測ります)
□歩き方(ふらつき、斜傾)
□脱水症状(背中など皮膚をつまんで放しても戻らない)

緊急時の応急処置

●動物の運び方

動物の意識がないときは、息ができるよう首の角度に注意しながら、毛布などの丈夫な布や平らな板に乗せて運びます。動物をゆすったり必要以上に動かさないようにします。普段はおとなしくても、痛みや興奮などで咬みつくことがあります。布でくるむなどの対策をとり、なるべく患部を動かさないように運びます。



●骨折や打撲

痛がっても傷口がない場合はまずは患部を冷やし、動かさないようにします。明らかに変な向きに曲がっていたり、異常に腫れているなど、骨折が疑われるときは元に戻そうとしないようにしましょう。

●ケガ(止血)

出血があまりないときは、まずは傷口の汚れを流水で洗い流します。水がない時はできるだけ汚れを取り除きます。出血があるときは、乾いたきれいな布で傷口を直接強く押さえます(直接圧迫止血)。包帯やハンカチできつく巻くことも同様の効果があります。



●やけど

速やかにきれいな流水で患部を5分以上冷やします。水がない時は、冷やした布をこまめに替えて冷やします。全身または広範囲のやけどの場合は、水をためた浴槽につけたり水に浸したタオルで全身を包むようにして冷やします(低体温にならないよう注意)。皮膚が赤く腫れたり水ぶくれができている場合は、冷やした後に傷口をラップなどで包んで、病院に運びます。

●熱中症

体が異常に熱い、息が荒い、舌が異常に赤い、意識がない、意識があっても倒れたまま動かないなどがみられ、命に関わります。速やかに涼しい場所に移動し、体に水をかけ、後頭部、足先、首、脇、後ろ足の付け根を重点的に冷やします。体温が下がっても脳や内臓に障害がおこることがあるので、速やかに病院に運びます。



● 冷やす部位

災害後にペットと過ごす注意点

自宅が危険な場合や避難指示が出ている場合はペットと避難場所に同行避難します。また、避難所での対応については、災害の規模や収容施設の大きさ、被災者の数などにより様々です。安全な状態であれば、避難所に行かずに自宅にとどまるという選択肢もあります。状況に応じていろいろなシーンが想定されますので、自分とペットの安全を優先して選ぶようにしましょう。

避難場所…緊急で一時的に避難する場所 避難所…災害等により自宅に戻れない場合等において一定期間避難生活をする場所

避難所で生活する

避難所では人とペットは別の場所で生活し、ペットの世話は飼い主が自ら行うことが原則です。いつも以上に周りの人に配慮し、飼育スペースや排泄物の処理など決められたルールを必ず守りましょう。飼い主同士で助け合い飼育エリアの確保や清掃を行えるとよいでしょう。また、ペット（特に猫）は1日のほとんどをケージの中で過ごすことが多くなるため、ケージを布で覆って目隠しをしたり、段ボールで簡易ハウスを作るなど、飼育環境を整えて、ストレスを減らす工夫をしましょう。



自宅で生活する

自宅が安全なら、住み慣れた自宅にいる方がペットも安心です。ただし救援物資と情報は避難所に集まるので、必要に応じて取りに行くようにしましょう。人は無理でもペットが自宅で生活できる状況なら、避難所から世話に通う方法もあります。二次災害の危険があるときは、同行避難をしましょう。

車の中で生活する

周りに気を使わず過ごせませんが、狭い空間では、エコノミークラス症候群にならないよう定期的に車外に出て動いたり、水分をこまめに取りましょう。また、車内温度は思ったよりも上昇するため、人もペットも熱中症の危険があります。温度や湿度を確認するなど注意が必要です。

施設に預ける

避難所に入れない場合や、飼い主の事情、ペットの健康状態などにより、自治体の収容施設、動物病院、動物保護団体などで預かってもらう場合があります。家の再建まで長期に預けるだけでなく、家の片づけや仕事のために数日または数時間預けることもあります。預ける前に条件や期間、費用等について必ず確認し、誓約書なども交わしておきましょう。

平成28年4月に発災した熊本地震で避難生活をした飼い主の方から、様々なご意見をいただきました。

ペット飼い主からの声



避難所における獣医師による問診

ふんの放置を注意される飼い主が多く、トラブルになった

ペットの飼い主同士で「飼い主の会」を作って協力し合えた

テント内で過ごす時には、脱水症状に気がついた

ペットがいることでコミュニケーションのきっかけになった

病気のペットの療法食を備えていなかったのが困った

屋内で運動させられる場所があればよかった

飼い犬がおとない性格だったため、気兼ねなく過ごせた

余震などで犬が吠え、遠慮して自宅に帰る人もいた

獣医師の巡回があったので相談もできとても助かった

車中泊していたペットがストレスで吠えるようになった

日頃からトイレのしつけをしていたのでトラブルはなかった

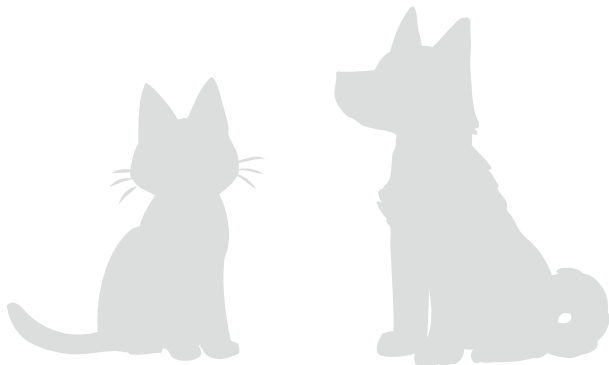
支援物資の慣れないフードで下痢や嘔吐がみられた



避難所のペット飼育専用施設の例

ペットや飼い主の情報を記入して、防災グッズなどと一緒に保管しておきましょう。

◆ペットの情報◆

顔のアップの写真 (できれば飼い主と一緒に写っているもの)		全身の写真 (できれば模様や尻尾の形など特徴がわかるもの)	
			
名 前		性 別	オス・メス / 不妊去勢 済・未
種 類		体 重	
毛 色		生年月日	() 歳
マイクロチップ	未・済 (番号)	鑑札番号	(犬)
ワクチン接種	未・済 (種類)	最近の接種日	年 月 日
既往症 (持病、飲んでいる薬、アレルギーなど)			
性 格			
特 徴			

◆飼い主の情報◆

氏 名	家族の氏名
電 話 自宅	携帯
メール ①	②
住 所	
非 常 時 の 連 絡 先	電話
かかりつけの動物病院	電話



発 行：環境省自然環境局総務課動物愛護管理室
所在地：〒100-8975 東京都千代田区霞が関 1-2-2
<http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/>
編集・イラスト：つしまみかこ
平成 29 年 9 月発行



○お問い合わせやご相談は、お近くの都道府県、政令市、中核市等の担当窓口へ